子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1998年1月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'98年1月　NO.81

「うゐ」沢田明子

(財) 高知市文化振興事業団

本を取り巻く話

吉村浩二

この数年にわたって論議されてきた、書籍、雑誌、新聞などの再販制度について、政府の行政改革委員会の中の規制緩和小委員会は、「再販制度廃止を求める」という報告原案を提出した。これにより戦前から商慣習として定着、戦後も独占禁止法の例外として、文化普及に貢献してきた本などの定価販売は、大きな改革を迫られることになった。

●

単純に考えると、これまでより本が安く買えそうに思うのだが、欧米各国の例を見てもことはそう簡単にはいかないようである。勿論、価格が弾力的になる訳だから安く手に入るものもあるが、戦後の一時期あった雑誌などの地方定価が復活し、地方は輸送費がかかるから、中央よりはあらかじめ価格を高く設定される恐れは充分にある。

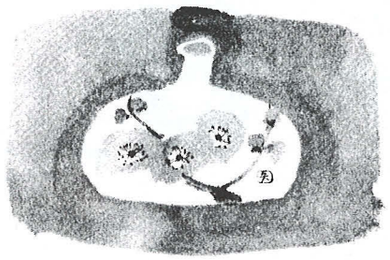
さらに、専門書など小部数出版は高価格になり地方では手に入りにくくなるし、ベストセラーや大衆に迎合的な出版のみが、出版の主流になることも予想される。こうしたことから「過当競争を招き文化破壊や地方切り捨てにつながる」という識者も多い。ともあれ、これを機に書籍雑誌の価格論議は、一段と高まることだけは間違いないようである。

●

低迷する出版業界にとっては、黒船襲来とも言うべき「再販廃止」に加え、社会現象の中での「活字離れ」の現実がある。若者、学生はことに顕著で、最近の読書調査によると、一カ月間に一冊も本を読まない中学生は半数、高校生に至っては七割にも達するというから深刻である。

単なる活字離れではなく、メディアの多様化からくる時代の側面もある。雑誌やコミックは今まで学生の小遣いの優先権を保っていたが、ここにきてプリント倶楽部やポケットベル、携帯電話に取って換わられている。この差はかなり大きいと言わざるを得ない。二年程前は毎週六五〇万部も出し、オバケ週刊誌といわれた「少年ジャンプ」も、今や二〇〇万部も減ってしまい、書店の数も新規店数より廃業店数の方が上回るという厳しい現実がある。

●



戦後五十年が過ぎ、行政、経済、金融、教育など多くのシステムでひずみが生じてきた。読書の世界もその例外ではなく、一時期は読書推進運動の主柱を成した、読書感想文コンクールのあり方も、賛否を問われるようになってきた。それに伴い課題図書の売れ行きも一時の勢いは無くなってきている。

●

本来、読書は面白くて楽しいものであるべきものが、読書感想文を書かねばならないという強迫観念に押され、読書から遠ざかる原因になっているともいわれる。そこで、もっと自由にもっと気楽に読書を楽しもうという趣旨のもとに始まったのが「朝の読書十分間運動」である。

「みんなでやる。毎日やる。好きな本でよい。ただ読むだけ」。このシンプルな理念が受けて、関東地方の高校を中心に全国的な広がりを見せはじめた。始業前の十分間だけ、先生も一緒に好きな本を開く。これだけで情操教育をはじめ、いろんな方面で教育効果が表れているという。混迷の時代に新しい息吹きを感じさせるこの運動に期待したい。

（よしむらこうじ・金高堂
書店代表取締役）

先を見据えて・鈍臭く

松岡啓介

スポーツは観るのもやるのも好きである。特に、野球と長距離。レベルはともかく、自分でも草野球を楽しみ、職場の駅伝チームの（自称）有力メンバーでもある。日頃の筋力トレーニングが試合でヒットなどの成果につながる時の充実感は何とも言いようがない。

高校野球は、甲子園に故郷高知のチームが出てくるともう仕事が手につかない。どんどん勝ち抜いていってほしいと必死で応援している。ところが、最近成績が芳ばしくない。高知のチームは、プロで通用するような超高校級のピッチャーが出てこないとなかなか勝てない状況になっている。また、攻撃も淡泊でヒットが出ても点につながらない。勝つためには、超高校級のピッチャー＋豪快なホームランという構図。なんとも芸がない。

元来、高知県人は目立ちたがり屋だが、粘りがないと言われている。自然環境（太平洋を眼下にすると気分が壮大になるのも納得できる）や気象条件（台風が豪快に吹き荒れ、樹木が根こそぎ倒れたりするのを見ると気分的に派手になるかもしれない。雪に閉じ込められると家の中でじっと思索にふける以外に仕方がないだろうが）のなせる業であろう。この県民性の短所がチームの弱さとなっていないだろうか、と思うのである。

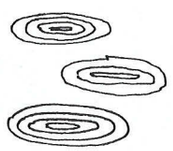
打たれ強いピッチャーの育成と、ヒットがなくても点が取れるような神経戦に強いチームに仕上げてもらいたい。このためには、「派手さ」と裏腹の「鈍臭さ」が必要ではないかと思う。

サッカーのワールドカップアジア予選・対イラン戦の後、日本チームの二、三人のメンバーは結構「冷めた」感想を述べていたが、上面でなく地に足がついた「冷めた、沈んだ」気持ちが勝利につながった要因だと思う。

「派手さ」と裏腹の「鈍臭さ」、地に足がついた「冷めた、沈んだ」気持ち、この二つが、特に高知には必要な気がする。

さて、高知の評判は、「酒好き」「離婚率が高い」など、ロクでもないものが目立つ。しかし私は、そんなに悪いこととは思わない。乱世に聖人君子が出る確率が高いし、荒れたクラスからは飛び抜けた生徒が出ることがある。評判は芳ばしくないが、高知は世の中を変える人材が育つ素地を持っている。気候温暖な優等生的な県からは大人物は育たない。

昨年の夏、祭りで死者が出たから、翌年からは参加を取り止めるという村があったが、こういう事なかれ主義的な発想には反対である。こういう憂慮を吹き飛ばすほどの盛り上がりや気概が祭りにはあっていいと思う。アメリカの服部君事件では、銃規制が随分と話題になったが――実は私の子供も服部君と同じ名古屋市内の高校に当時在学していた――私はアメリカ人の「自分の身は自分で守る」という気概はいいと思う。こういう発想がアメリカの強さの源ではないかと思っている。私の専門分野でもアメリカの底力はすごい。このような気概・気宇壮大さは高知には備わっている。あとは、冷めた気持ちで鈍臭く実践するだけではないかと思う。



最後に、目標・方針をどうするかは上層部の責任である。核融合などの巨大科学の分野では、今や実験装置の設計・製作に最低でも十年はかかる。一旦設計が決まり製作が始まるとほとんど変更は効かない。十年前の設計に基づいた装置が完成した暁には、既に時代遅れになってしまう危険性が考えられなくもない。ときたま新聞に出る国際熱核融合実験炉（ITER）は十年では到底建設出来ない、お上やトップの判断は何にもまして重要である。先の見えない上層部では現場はたまらない。しっかりと先を見据えてもらいたい。

（まつおかけいすけ・文部省
核融合科学研究所・研究主
幹・教授・名古屋在住）

南の国の友人を訪ねて

高知市の姉妹都市スラバヤ

小林　英治

高知市がインドネシアのスラバヤ市と姉妹都市となったことを記念して、市民友好団が平成九年十月末にスラバヤ市を訪れました。松尾徹人市長を団長とする九十一名からなる友好団には、企業家や園芸農家、教員、主婦などさまざまな市民の方々が参加されました。「インドネシアは初めて」という人が大部分で、南の姉妹都市への訪問に期待を膨らませておりました。

一行は首都のジャカルタを経由して、同じジャワ島の東端に位置するスラバヤ市に到着しました。東ジャワ州の首都スラバヤは人口三六〇万人を数えるインドネシア第二の都市だけに、市内の道路は夕刻のラッシュアワーとも重なり、混雑を極めておりました。バスやトラック、乗用車にまじって、インドネシア特有の乗り物ベチャ（人力車）も見えます。

いっしょによさこいを踊る（写真：高見良博）

到着した晩スナルト・スラバヤ市長が公邸で歓迎のパーティを開いてくださいました。私たち一行はナシゴレン（チャーハン）やサテ（焼き鳥）などのインドネシア料理を味わい、伝統舞踊や歌を楽しみました。

広いホールの中は両市の人たちの熱気があふれておりました。庭に出るとヤシの木陰に涼しい風の吹く南国の夜でした。

高等学校を訪問

翌日私たちは、スラバヤ第二高等学校を訪問しました。講堂で行われた歓迎式典では、三年生のカロリンさんと二年生の片岡マイさんが司会をしてくれました。片岡さんは徳島県から来ている留学生で日本語で説明してくれたので助かりました。校長先生の学校紹介のあと、五十名ほどの男女生徒の合唱団が「ブンガワンソロ」などインドネシアの歌を披露し、女子生徒が農村の伝統的な踊りを踊りました。

そのあと私たちは、広い校庭を囲むように建てられた教室を訪れ、授業を参観しました。歴史やインドネシア語、英語、宗教の授業でした。宗教のクラスでは、イスラム教の習慣に従い、白いベールを被った女の教師が教壇に立っているのが印象的でした。生徒たちは皆ニコニコして私たちを迎えてくれ、別れ際には、「サヨナラ・サンパイ・ジュンパ・ラギ」（さよなら、また会う日まで）というインドネシア語の別れの歌をいっしょに歌いました。

課外で日本語を教えているというこの学校、壁には「山紫水明」「環境保全」などと上手に書かれた習字が張られていました。ホテルのフロント係の人に高等学校訪問の話をすると、「私もあそこの卒業生です」とのこと。「比較的裕福な家庭の子弟が学び、学業水準の高い学校です」と彼女は話してくれました。

友好団のほとんどの皆さんにとって、この訪問は忘れがたい思い出となったようです。土佐塾高校で英語を教える福井朗先生は「スラバヤの生徒さんたちが一生懸命に勉強しているのを見て感激しました」といっていました。会社を経営する萩原宏徳さんも「学校を訪問できてよかった」と同感のようでした。

陽気な高校生たち（写真：高見良博）

スナルト市長は、松尾市長との公式会談のなかで、貿易や観光、ビジネス面での協力と並んで、教育分野における交流を強く望んでおりました。経済開発を進めるインドネシアにとって必要なことは、これからの人材の育成です。高知市の中学・高等学校とスラバヤ市の学校との交流が来年から始まるとのことですので、成果を期待したいと思います。

庶民的なスラバヤ

私たちの滞在したシェラトンホテルの隣にはツンジュンガン・プラザというインドネシア第一の近代的なショッピングセンターが建てられ、多くの買物客で賑わっていました。すぐ近くには、日本のそごうデパートのビルが建築中でした。数年前ジャカルタに駐在していたとき、私はこの街を訪れたことがありますが、中心街の風景が大きく変わっているのに驚きました。

▲建築中のビル

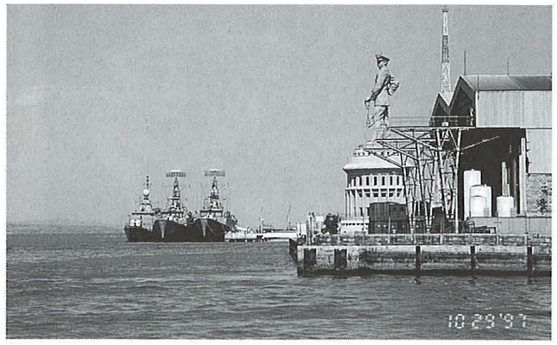
しかし近代的な街並みから一歩裏通りに入ると、昔ながらの風情が感じられる街でもあります。朝早くホテルを抜け出して、パッサール・ゲンテンに行ってみました。ここはインドネシアの街によく見られる朝市で、色とりどりの衣装をまとった土地の人たちであふれていました。

朝市のにぎわい▶

いっしょに行った市役所総務課の浜野淳子さんは、野菜や果物、魚、チキンなどが並べられている市場の活気に圧倒されたようすで、「スラバヤの庶民性が好きになりました」と言う。私たちはヤシの実を割ってもらって喉を潤しました。

この近くには風格のあるマジャパヒト・ホテルがあります。ここは日本の占領時代「大和ホテル」と呼ばれ、土地の人たちから「ケンペイタイ（憲兵隊）」として恐れられた将校たちの宿だったところです。従軍慰安婦たちも出入りしたといわれています。

スラバヤは「英雄の都市」として知られ、市民たちはかつてオランダに激しく抵抗して独立に貢献したことを誇りに思っております。「銀の岬」を意味するタンジュン・ペラ港が古来スラバヤへの玄関口として栄え、同時にインドネシア東部の島々をつなぐ役割を担っています。広大なインドネシア東部地域は比較的遅れており、この地域の開発に果たすスラバヤの役割は重要です。



タンジュン・ペラ港（写真：高見良博）

南の国スラバヤ市との友好が今後数多くの実りをもたらすことを願って、私たち訪問団はこの愛すべき街と人々に別れを告げました。

（こばやしえいじ・高知大学人文学部教授）

現代文学館考

―文学館と私―

津田加須子

高知県立文学館がオープンして、はや一カ月。今年七月から当文学館に勤務しはじめた私にとって、新しい館と共に歴史をきざめるということは、非常に光栄な事である。

私は以前、本山町立大原富枝文学館という、ちょうど四国山地中央に位置する人口約五千人の町立文学館に勤務していた。常勤は、館長と私の二名。必要に応じて臨時の方を雇うといったシステムの中、日常の業務をこなし、年三回から四回の企画展、小中学校の作文、高校生の小説・随筆、一般の小説・随筆等を県内より募集し大原先生の最終選考にて締めくくられる大原富枝賞の企画・選考・表彰、本山町出身の俳人右城暮石を顕彰して開催される全国俳句大会及び句碑建立、といった事業を抱えていた。なぜ町立の個人名の文学館でそこまで、とおっしゃる方もいらっしゃるであろうが、この館は、広い意味での地域文化の振興・発展、情報の発信を基本理念としているからである。このため、特別企画展なども文学的な事業にとどまらず、「池知隆切り絵展示」「古民芸展」「松の木遺跡展」など、幅広く取り組んできた。また、大原富枝を囲む会（やまなみ会：会員全国に二五〇名）の事務局をつとめさせていただいたのも、私にとっては、大変な財産となった。

ところで高知県立文学館がオープンして、十一月二十四日現在、二、七一九名の方が当館を訪れて下さった。この中には、ホール使用者の人数が入っていないので、これらの人数を加えると、三、〇〇〇人は優に超えるであろう。この数を、多いと見るか少ないと見るか、見方はそれぞれであるかと思うが、ちなみに、全国文学館協議会で中心的な役割を果たしている神奈川県立近代文学館の平成八年度入館者数は、約二五、〇〇〇人で（「神奈川県立近代文学館集計」より）ある。

通常文学館は、資料の収集、保存、公開、公表を目的としている。また多くの文学館において、資料の展示を中心とする啓蒙・普及が文学館の活動の主要な目的とされており、展示は通常、原稿、日記、書簡、初出誌、初版本、色紙・短冊等の書跡、さらに写真、パネル等により構成される。文学の研究資料としての価値はともかくとして、色紙・短冊等の書跡や写真等は、展示の素材としては欠かせないものである。これらは、取り上げられている文学者に関心をもつものにとっては、極めて興味深いものであるが、その文学者の作品をほとんど知らない、あるいは読んだことのない来館者に対して、その文学者の理解に資し、あるいは関心を呼び起こすような展示は至難であろう。この難しさが全国的にみて文学館の来館者が限られている理由となっていることも否定できない。その他、多くの文学館、ことにある地域の文学館はその地域の文学、文化活動の核ないし発信基地としての役割、あるいは、個人の記念館の場合であればその文学者個人の顕彰と

いった役割も担っている。多くの方々にいかに足を運んでいただくか、今、文学館がかかえている課題であろう。

県立文学館では、年四回の特別企画展を予定している。開館第一回目は、好評を博している、師弟が見た近代―漱石、寅彦の留学体験―である。文豪と呼ばれ、今日の日本の文学界に偉大な足跡を残した漱石も、ヨーロッパという異国の文化には親しめず、社会の中で孤立し、自分を孤独の世界に追いやってしまう。早々と異国の文化にとけ込んだ寅彦との比較においても非常に興味深い。

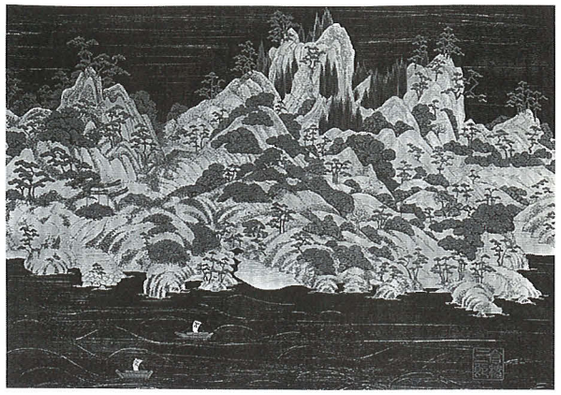
また、夏目漱石は、明治大正の文壇のみならず、装丁界に及ぼした影響も大きい。漱石の全著作を装丁の上から見ると、最初の『吾輩ハ猫デアル』（明治三十八年から四十年刊）以下橋口五葉に一切を委ねた時代、大正三年（一九一四）刊の『こころ』『障子戸の中』等に見られる著者自身が装丁したもの、それ以降の、津田清風が装丁した『道草』『明暗』の三時代に分けることができる。いずれもそれぞれの特色を示し、ことに五葉装丁の『吾輩ハ猫デアル』は上・中・下ともカバー、表紙の意匠をかえ、当時最も新鮮味のあふれるものとなっている。また著者自身の装丁になる『心』は、序文の中で「装丁のことはいままで専門家ばかり依頼していたのだが、今度はふとした動機から、自分でやってみる気になり、箱・表紙・見返し・扉及び奥付の模様・題字・朱印・検印ともに、ことごとく自分で考案して、自分で描いた」といっているように、全て著者自身の手になり、ついに同書装丁は彼の全著作を代表することになり、その後の漱石全集の装丁に踏襲されているのである。

実は第二回企画展に、この装丁・装画を取りあげたいと今取り組んでいる。平成十年二月十七日より、第二回企画展倉橋三郎里帰り展「倉橋三郎装丁・装画の世界」を開催する予定である。倉橋三郎氏は、「パルタイ」などで有名な、高知出身の作家倉橋由美子の実弟であり、約一、三〇〇冊もの装丁・装画を手がけてきたブックデザイナーである。東京を拠点として活躍中の倉橋氏の「是非ふるさとのみなさんに、この世に一点しかない倉橋絵巻を見ていただきたい」との希望で、今実現へと準備が進んでいる。世界的な装丁研究家として知られたドイツのハンス・ルビエルは「美しい形をもった良いものは、その価値を倍加する。すなわち美しい形の整った装丁の本を見るとき、一層の書物愛が高められる。それはあたかも高貴なワインを上品な形のグラスから飲むときのように、あるいは珍しい新鮮な果物が、高貴な美しい皿に盛られた時のように、われわれに快い、読書欲をそそるものである」といっている。ぜひそうあるよう願っている。

先日、県外の美術館に勤務する知人にいわれた「津田さん、文学館はなぜ必要なのですか」という言葉が今胸をよぎる。県立文学館は、今県内外に向け、情報発信をはじめたばかりである。

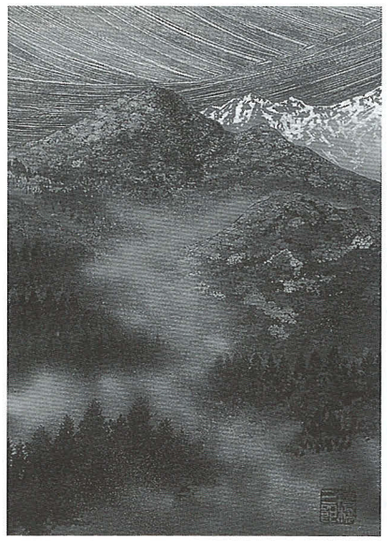
平成九年十一月執筆

（つだかずこ・高知県立文学館学芸員）



「奇謀の島」古―黛著（新人物往来社）装画・倉橋三郎

「日溜まりの水」立松和平著（河出文庫）
装画・倉橋三郎



「山の民」上・下巻・江馬修著（春秋社）
装画・倉橋三郎

自然史学の復興を願って

［中］

町田吉彦

オランダで驚くのは街並みの古さである。三百年も四百年も前に建てられた長屋形式の建物に人が住んでいる。アンネの日記に出てくる、屋根裏部屋付きの建物である。ライデン大学の本部と図書館はかろうじて周囲から独立しているものの、日本の常識では考えられないことであるが、講義室や研究室の一部が長屋に同居している。すなわち、長屋の中には会社のオフィスもあり、人も住んでいる。

おまけに国土の四分の一は海抜ゼロメートル以下で、埋め立て地の古い建物は好き勝手な方向に傾いている。オランダの友人は、「私の部屋など、鉛筆が転がるよ」と真顔で話してくれた。もうひとつ、オランダ人は総じて大柄で、教授と立ち話をする時は首が痛くなる。「ジャガイモが主食だからね」と教授は笑う。

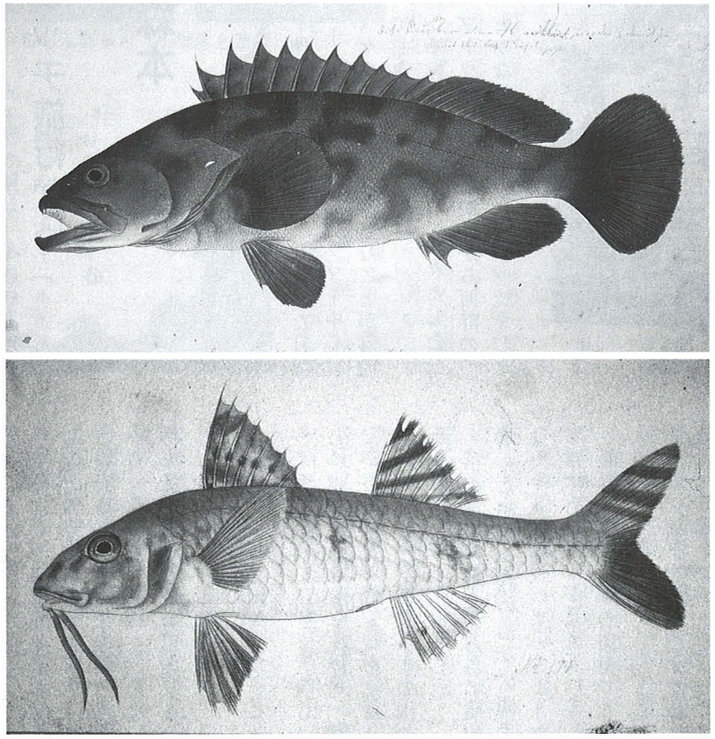
ある日、教授が市内で最も古いレストランでの夕食に招待してくれるという。山口さんはライデン名物の「ヒュッツポット」を食べてみたいとしつこく教授にせがんだ。「困ったなぁ。レストランで食べる物じゃないんだよあれは……。交渉はしてみるけど。期待しないでくれ」と話した時の教授の顔を思い出すと、今でも吹き出しそうになる。オランダの食事は実に質素である。二人が大いに期待したメイン・ディッシュは日本でいう「肉じゃが」だった。昔ライデンの人達がスペイン軍を撃退した時の記念の料理だという。

現役は引退したが、教授の研究室は二階の中央付近にあり、誰の研究室よりも広い。ただでさえ天井が高い研究室の壁には世界中の文献がうず高く積まれている。そのほとんどは、教授がアメリカでの留学時に食費を節約して購入したものだ。ピーナツバターを塗ったパンと牛乳だけで毎日の三食をすませたという。「そりゃあひもじかったさ。でも、必要な文献を手に入れる喜びに比べれば大したことじゃないよ」。以来、教授はピーナツバターを口にしたことがない。教授が公表した論文の数は尋常ではない。教授は椅子に座ったままで右手を軽く胸ほどに挙げ、「さぁーて、これくらいかな」と微笑む。すでに七百編は軽く超えているはずである。莫大な数の論文とその質の高さ故、世界の甲殻類学者の誰しもが「エンペラー」と呼ぶのは当然である。

オランダ国立自然史博物館の魚類液浸標本の一部、シーボルトが採集した種の模式標本も含まれている

博物館の標本の管理システムは凄いの一言につきる。スミソニアンや大英博物館の比ではない。まず、二人のガードマンの目の前で来訪者名簿にサインをする。ガードマンが帰った後は自動監視システムが稼動する。私の滞在中に泥棒が侵入した事件があったが、自動扉に挟まれ、片腕を失った。魚の液浸標本は二重扉の標本室にある。部屋には自然光が入らず、標本の劣化が妨げられている。温度も湿度も調整されている。夏でも厚着をしてないと寒くて仕事ができない。剥製標本は頑丈な鉄製のロッカーに収蔵されており、さらに年に一度、建物全体を燻蒸している。一八〇〇年代半ばの日本の魚に直接触れた時の感動は今でも忘れ難い。シーボルトが江戸の絵師川原慶賀を出島に招いて描かせた魚の絵も完璧に保管されている。この絵はオランダで出版されたが、実物を見たのはむろん初めてであった。シーボルトが指導した、日本人による最初のサイエンティフィック・イラストレーションである。全ての採集物がこのような完璧な管理下にあっては、日本のどんな研究施設が逆立ちしても勝ち目はない。建物全体は煉瓦造りであるが、皮肉にも液浸標本室を設計し、空調設備を入れたのは日本のメーカーであった。

かの泥棒氏は「あそこには金目の物が何もない」と警察で語ったそうである。教授は「標本と文献があるのに……。知性の問題だね。古い標本は二度と入手できないから、いくらお金を積んでも買えないんだよ。博物館の職員は何が何でも標本を守らないといけない。私もその一人として財産を守ってきた」と淡々と語った。標本や文献は興味がない人にとってはゴミである。私は最近、自然科学に利便性のみが要求されているのではないかと危惧している。自然史学は博物学ともよばれ、植物、動物、鉱物、地質を対象とする学問である。自然史学や博物学は、英語のNatural historyの訳語である。historyは普通「歴史」を意味するが、ギリシャ語のhistor「知る」と、行為、方法、手段を示す接尾語-iaで形成されるhistoria、すなわち、「知ること」に由来する。フランシス・ベーコンはhistoryは「経験」であり、物事を見極めることと明快に説いている。そして彼によれば、その経験は人の経験と自然の経験とに分かたれる。自然を見極めるには知的好奇心と標本が必要である。



シーボルトが江戸の絵師川原慶賀に描かせた魚の絵の中から
（上・クエ、下・ヒメジ）

欧米の文化と大学の教育・研究システムが日本に導入された時、真っ先に欧米の博物学者を招聘し、日本の博物学の礎を築いたのは東京帝国大学である。しかし、真っ先にそれを放棄したのも東京大学である。すなわち、標本は東京大学で真っ先にゴミとして扱われた。二年前、かすかに残っていた勢力と国立科学博物館の協力により、自然史学の拠点が東京大学にようやく復活した。この間、日本の自然史学を支え続けてきたのは、田舎の特定の国公立大学であった。金とスペースが必要な割には直接世間様の「役に立たない」自然史学の教育と研究は、私立大学にとってはほとんど無縁の存在でしかなかった。

（まちだよしひこ・高知大学理学部教授）

［訂正］

前号「自然史学の復興を願って」［上］中、4ページの鷲鳥（わしがとう）は鵞鳥の誤りでしたので訂正いたします。

「文化高知」編集部

フランスの子どもたち

南フランススケッチ旅行から

森本　忠彦

初夏の光と風の中で

バスの窓から見える丘陵には、赤やピンクのコクリコの花が咲き乱れ、風に揺れています。はるか遠くの山へかけて広がる丘の鮮やかな緑とぬけるような青い空、これらの色のコントラストが何とも言えません。

六月の南フランスは、一年で最も爽やかで美しい季節だと言われています。

今回の旅は、高知県美術家協会が主催した「南フランス取材旅行」ということで、美術を愛する連中二十数名が、土佐弁を使いながら、ゆったりとした日程（十一日間）の中、グラマを中心にスケッチや観光を楽しむことが目的でした。

季節は初夏……。広々とした丘、ブドウ畑や牧草地が広がる河畔ののどかな風景の中で、スケッチをしているとのんびりとした気分になります。

グラマの古い家

グラマでの二日目は、険しい断崖上に建つ古い家屋や礼拝堂、廃墟などがあるロカマドールを見物。昼食は、シルク・ドトワールの山の上でとりました。

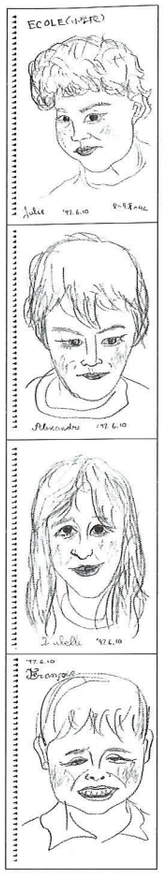
はるか下には、赤茶色の屋根が密着した集落が緑の山々に囲まれて、ひっそりと息づいているような小さな村オトワールが見えていました。

昼食後は、世界の洞窟でもその巨大さで有名な「パディラックの洞窟」を訪れ、地下の川や巨大な鐘乳石等に、ただ驚くばかりでした。約一時間後、谷間の小さな田舎の村オトワールに戻り、中世に迷いこんだかのような風景に引きつけられ、橋の上の古い家やキリスト像等のスケッチを数枚したことでした。

この村には、小さな小学校があり、午後五時頃でしたが、女先生と四人の子どもたちがいました。日本人が珍しいのか、スケッチをしたり写真を撮ったりしている私たちの方へ寄ってきます。土佐山の子どもたちの姿が頭をよぎります。私は、かわいい元気いっぱいの小学生たちの顔をスケッチさせてもらいました。

フランス語の堪能なI氏が、先生や子どもたちに聞いたところ、この子どもたちは親が迎えに来るのを待っているとのことでした。日本でいえば、へき地の学校でしょうか。少人数の家庭的な雰囲気のある学校でした。

オトワールの村で



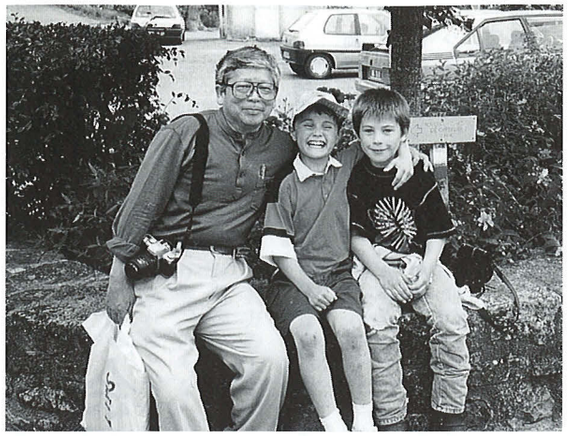
子ども写真の第一人者と言われる田沼武能氏の写真集『ぼくたち地球っこ』の中に次のような文がありました。

「あの顔この顔、子どもの顔には無限の表情がある。喜、怒、哀、楽の四文字ではとてもいい表せない、たくさんの表情を持っている。

子どもの瞳は澄んで美しい。なぜだろう。心がけがれていないからだとひとは言う。」

「どこの国でも、子どもは一番美しい存在である。澄んだ瞳は、けがれない子どもの象徴である。彼らには、幸福も不幸も自分自身で選ぶことが出来ない。その無心な姿が、真珠のように輝いた瞳を見せるのではなかろうか……。」

ここで出会った子どもたちの顔も実に愛くるしい表情で、一人ひとりの瞳が輝いていました。迎えに来た母親と車に乗り込み、身を乗り出して手を振って帰っていった子どもたちが、純真さを失わず、二十一世紀へ向けてたくましく心豊かに育っていって欲しいと思ったことでした。



ボンジュールおんちゃん（小学生と筆者）

パリの高校生たち

グラマのホテル「ル・サントル」の朝は、小鳥の鳴き声で目が覚めます。グラマ最後の朝は何とも美しい朝焼けでした。

ペシュ・メルルの洞窟壁画の見学、サン・シルク・ラポンピー、カオールを経て夕方七時前にグラマに帰り、ホテルの食堂で夕食。ゆっくり時間をかけての食事は、ワインやビールがとてもおいしく、たくさん入ります。すっかりいい気分になり、ホテルの前のカフェレストランへ数人で出かけました。

夜九時だというのに、まだ外は明るく店の前のテーブルには数組の先客がいました。隣の席は、パリの高校生たちでした。彼等は先生たちと一緒に、パリから南フランスを回るサイクリング旅行中だということでした。「これからも頑張って行きや！」ということで、コーラやアイスクリームをおごり、日本語や片言の英語で身振り手振りで話も盛り上がり、楽しい時を過ごしました。

高校生たちが帰った後、引率の先生たちやカフェのムシュー、マダムも一緒になり、日仏の国際交流を夜がふけるまで続けました。

十数名のパリの高校生たちのサイクリング旅行。日本の高校生と比べて「何とゆとりのある豊かな高校生活ではないか！」と思いました。

青少年は次の世代を担う国民です。どこの国も教育には熱心です。国の未来を良くするには、教育以外は考えられないと人は言います。

長い歴史と伝統のある国フランス。それぞれの地方に個性的な顔の町や田園が広がっているように、高校生たちから一種のたくましい大人を感じ、フランスの教育のすばらしさの一面を垣間見ました。

カフェレストランで、パリの高校生たちと国際交流

（もりもとただひこ・土佐山小学校長・二科会デザイン部会員）

岡本弥太余聞（二）

堀内　豊

岡本弥太と池本寿が、赤岡小学校（香美郡赤岡町）で再会すると、その日から親しく会話をかわすようになった。

弥太は詩人特有の感性で、理知で情感をそなえた寿にたちまち惹かれて、なにかにつけて触れ合う機会をもとうとした。

まもなくして、寿はニック・ネームをつけられた。モナリザ。〝モナリザの微笑〟で有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの肖像画のモデルになったフィレンツェの妻の容貌に似ているというのである。

ニック・ネームの命名は、弥太の詩友、池上治水（香美郡香我美町山北）である。それいらい、歌人の恒石草人（香美郡奥西川）。俳人、湯山愧平（高知市・一壺春創始者）。教師の中村伝喜（香美郡吉川村）たちが、ことあるごとに〝モナリザ〟を引き合いにだして、岡本弥太をひやかした。

当時の女教師の服装はおおむね和装で、行燈袴をはいていたのに、池本寿だけは洋装で、白いレースの襟飾りをつけて、金茶いろのワンピース。ベルトは規格外のオリーブで、ことさら人目をひいた。

要するに、女教師タイプの枠からはみだした異色の存在で、田舎町の小学校であるだけに注目を浴びた。

ところで私が池本寿を識るようになったコトの起こりは、昭和五十一年（一九七五）四月下旬から、高知新聞に岡本弥太の略伝を連載することになり、池本寿の居処を探して難渋していたところ、ある偶然が重なって、東京に居ることがわかった。

二月の始めに上京した。東京駅八重洲口の茶房で面談できた。なんと彼女は、四月の終わり頃に高知へ来ることになっていた。なんでも岡豊小学校（南国市岡豊）の同窓会に旧師として招かれていたのである。

来高した池本寿は、拙宅で二晩泊まってくれた。彼女は旅の疲れもいとわずに、二夜遅くまで岡本弥太との愛の葛藤を語ってくれた。

「……ある時、弥太さんとしめし合わせて、こっそり月見山（香我美町岸本）へ上がったことがあるの。坂道で弥太さんが、すらすらと手帖に書いたのをひきちぎって、渡してくれたわ。それを今でもおぼえているの。こういう歌です。

これやこの名なしの浦にひとりきて
ひそかに流さむさびしきこころ

弥太さんのことを憶いだすと、いつもこの歌が浮かんできて、哀しくなるわ。

あの頃のことは、忘れようとしても、忘れられません。こういっては何ですが、わたしと弥太さんは一心同体だと、お互い思うようになっていましたのよ……」

ふたりの関係は昭和七年（一九三二）の春さきに、ぬきさしならない情態になっていた。たびかさなる逢瀬を同僚たちだけでなく、父兄の一部にも知られて、なにかと取り沙汰されるようになった。

そうしたある日。池本寿は教頭の橋田寿保（香美郡野市町）に教員室へ呼ばれた。

寿保は机のうえに肘を曲げて、あたりをはばかる口調で、

「ここではなしにくいから、今晩あしの家に来てくれまいろうか」と言った。

そのひとことで、寿は橋田教頭の意図がよめた。（きっと弥太さんとのことだ。でも、どう言われようとも、弥太さんとは離れたくない）とおもった。

その夜。池本寿は橋本寿保に諭された。

「あらためて言わいでも、分かっちょるろうが、じつは今朝、由さん（岡本弥太の妻）が玲（弥太の二女、当時三歳）をつれて来よって、泣きもって話しがあった。

岡本弥太の詩碑。昭和24年（1949）7月17日建立・高村光太郎書

池本くん。弥太とどうか別れてやってくれ。由さんや、瑠香（弥太の長女・当時七歳）や玲ちゃんのことを考えて、別れてやってくれないか。これ、このとおり頼む……」

と、橋田寿保は深ぶかと頭をさげた。

（つづく）

（ほりうちゆたか・雑文家）

ミュージカル「絵金」の舞台に参加して（6）

三浦　良一

◇十一月三～四日が公演でした。ゲネプロという名の舞台稽古を含めると、続けて五回の上演でした。さすがに、声のかすれた主役クラスさんも出ましたが、やればやる程にパワーアップする若者の熱気には圧倒されました。年寄りは、次第に疲れ果て、という感じだったのです。

そんな中で、最後までダメ出しを伝えてくる各先生方には、プロの執念といったものを感じ、ある種の凄味を覚えたものでした。

本番中の予期せぬ出来ごとといえば、最初の舞台で乱舞ダンス中に肩を脱臼し、次からの出演が不可能になる女の子が出ました。最終回のフィナーレにだけは、舞台の袖から、泣きながらの参加となりましたが、一生忘れられない舞台になった事でしょう。その他、歌舞伎の場面の処刑人がバレエシューズを履いたまま登場したり、背景のお月さんの前を裏方の人が通り過ぎたり、曲目が間違って出たり、台詞が抜けたり等、色々なことがありましたが、これはと言うほどのミスも無かったのは、練習の成果だと思います。

ただ、ラストのカーテンコールの時に起こったハプニングだけは、記録に値する事柄だったと思いますので、次に綴っておきます。

◇フィナーレのダンスを終えた後はどうするのか、起こるであろうお客さんの拍手に対してはどうぶかと一礼して幕。と言うのが一回目の振り付けでした。ところがやってみると、何か物足らないという感じが残ったのです。

「よし、次からは手拍子の後へ、祭りの曲を流すから、全員自由に体を揺さぶろう、ラストはワオーの掛け声とジャンプで決めよう」というのが須賀先生からの指示でした。

「リズムに合わせながら、客席へ下りて行って交流する場面も作りましょう」という話も出、みんなはワッと喜んだが、この点は「ちょっと待って…」という感じで、演出の方からクレームが付けられました。

「絵金祭りの曲を流すまでは良いが、学園祭のノリになっては……、自分達の気持ちを剥き出しにしてしまったら、心ある観客を白けさすだろう」というのが帆足先生のお考えであったと思います。観客と一体になって燃え尽くそうという姿勢と、その場限りにならない、それぞれのイメージを抱いてお帰り願いたい、という思いが微妙に交差した感じでした。

こうして迎えたラストでしたが、実際には、あっという展開になっ対処すべきか、については、事前に打ち合わせがされていたのです。最後には紗幕を下ろすから、ラストのポーズを保つ事、次第にライトが明るくなり再び紗幕が上がると、一同お客さんに合わせて手拍子を打ちながら後ろへ下がり、深ていました。

最後に主人公の絵金がライトを浴び、舞台の中央で拳を突き上げた次の瞬間、彼はそのままの勢いで、客席に向かって飛び降りていたのです。祭りのリズムと手拍子の波が高まる中を、後に続いた若者達の姿が、観客席を走り抜けていました。そこには十カ月の苦労を吹き飛ばそうとする雄叫びがあり、それを温かく受け止めてやろうとする観客の共感がうねっていたと思います。

握手や花束の手渡し、鳴り止まない歓声が続きました。ごく自然な交流でした。それは見識や意図、様々な思惑を超えて、立派に花ひらいた舞台の成功を物語る光景ではなかったでしょうか。

後始末のとき、改めて確かめて見ましたら、ステージと正面客席との段差は一メートル五〇近くありました。若し私も飛び降りていたとしたら、這い上がって戻って来るのに難渋し、またまた物笑いの種になっただろうと、ひとり冷や汗を拭った事でした。

（つづく）

タバコを吸うトラ

風俗歳時記

今年の干支に因んで、トラの話を書こうと思う。

話題の主は、おめでたい、朝鮮半島の〈タバコを吸うトラ〉。

この友人は、真しやかなホラを吹く名人であったので、眉に唾をつけながら、話半分に聞いたのだったが、その機知に富んだ発想に、ウーンと唸ったのを憶えている。

数十年前、ある友人が、「北朝鮮・韓国のお伽話は、『むかし、むかし、まだトラがタバコを吸っていたころ……』という前置きで始まる」と教えてくれた。

しかし、その後、この話は本当であって、北原白秋に、〈タバコを吸うトラ〉をうたった童謡があると、別の友人から教わった。

数年前、〈太田万博〉を観にいった、第三の友人が、一冊のカラフルな写真集を土産にくれた。

韓国の伝統的な風習や、民俗芸能の数々が、韓国語と英語の解説付きで、紹介されている。

英語の題名は、〝Our Life. Our Play〟（崔宇一編・檀国大学校刊）

その表紙を開いたとたんに、思わず目を瞠った。

見開き二頁にわたって、長い煙管を横ぐわえにした虎が、彩も鮮かに描かれている。

しかも、この虎が、実に剽軽な、とぼけた顔をしていて、なんともおかしい。

虎の右上方には、真っ赤な旭が昇っていて、瑞雲がたなびいている。

空に舞う一羽の鶴と、一羽の鵲。虎の傍らには、精いっぱい首を長く伸ばして、口から霊気のようなものを発している一匹の亀。

英文の解説によると、トラとカササギのコンビには、悪霊を祓う呪力があると信じられている、という。

中国に由来する、鶴と亀の取り合わせが、縁起を祝う、長寿のシンボルであるのは、言うまでもない。

（朴）

第8回 高知出版学術賞　推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②1997年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

上記の各事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書２部を添え、審査委員会まで提出して下さい。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【受付期間】

平成９年12月10日㈬～平成10年１月31日㈯

【表彰】

３点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会

散歩の途中で

紅葉橋の下手、川の真ん中ほどに直径３メートルもあろうかと思われる円柱状の工作物が埋められている。上の部分の円形が水面に顔を出している。伏流水の取水口で工業用水施設だそうだ。水は筆山の麓まで運ばれ、ポンプアップされて中腹に溜められ企業の需要に応えている。

30年程前に完成したということだが、時の経つのは早い。

風伯

提灯の火

法文の悪例を示すのに「提灯に火を付ける」という言葉があるそうだ。明かりを灯す意味と提灯そのものを燃やすという異なる解釈ができ、真の意味が分からないということだろう。

それにしても最近分からない事が多い。四年連続のコメの豊作による在庫増で生産調整の拡大が問題となっているにもかかわらず、外国産米を輸入している。国内で余る食糧をわざわざ輸入する国が他にあるとは思えない。生産者の耕作意欲を削ぎ農業崩壊への道筋を辿っているのではないか。自らの食糧の大切な部分にしわ寄せをしていれば、いずれその反動は大きいだろうが、〝飽食の国〟日本では食糧危機など考えも及ばぬのかも知れない。

他にも、何の弱みがあるのか総会屋に対する企業の利益供与や、国の景気予測の言い分等々分からぬ事は多い。

未だにずっと分からぬのは、国道にもある「落石注意」の看板だ。注意しても小石ならともかく大きな岩が落ちればどうしろというのだろう。加えて「スピードは控えめに」と来れば、頭は混乱の極みだ。

「ゆっくり走って潰される覚悟を！」か「無責任注意」なのか、といじけた解釈もしたくなる。

はてさて、我が国の先行きは、明かりが灯されているのか、それとも燃え尽きてしまうのか。分からない。

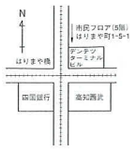
（かむ）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一―五―一　デンテツターミナルビル５F



お申し込み　㈶高知市文化振興事業団　☎73―4365

賛助会員募集中!!

会費　年額　2,000円

特典　①　機関誌「文化高知」を年６回お手元にお届けします。

②　事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）

③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）

〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕

お申し込み　①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

高知市民ミュージカル 脚本募集

ミュージカル「絵金」に続く第４弾、市民参加のミュージカルとして上演可能な、未発表のオリジナル脚本を募集。

内容（時代、題材等）は自由ですが、何らかの形で「高知」に関係しているもの。

最優秀作　1編　賞金50万円

佳　　作　1編　賞金10万円

応募締切　平成10年1月31日㈯

応募先　高知市文化振興事業団「市民ミュージカル脚本賞」係

＊詳細は事業団まで。

(財)高知市文化振興事業団の新刊本

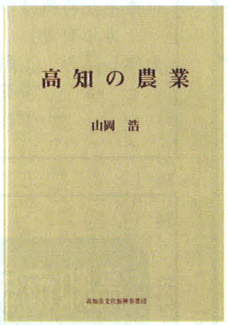
植木枝盛の生涯

外崎　光広著　四六判上製本・260頁
定価（1,900円＋税）

土佐自由民権期の最高の理論家植木枝盛の果たした思想的・社会的・政治的業績と、身上に発生した私的事件を簡潔にまとめた第一部「植木枝盛の生涯」（高知新聞連載記事に加筆）と、枝盛憲法草案と立志社憲法草案の関係や、その死因を解明した論考を集めた第二部「植木枝盛の研究」に、年譜を付した。
土佐の自由民権運動を語る上で欠かせぬ人物植木の絶好の入門書。

高知の農業

山岡　浩著
A5判・並製本・248頁
定価（1,800円＋税）



今、新たな道が問われる

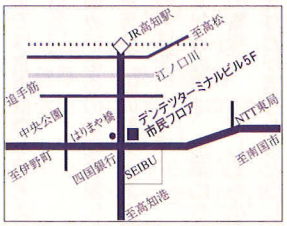
地域農業・農産・農に生きる人々を具に訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的な産地づくり事例を紹介するなかで未来（あす）の農業の在り方を考える。

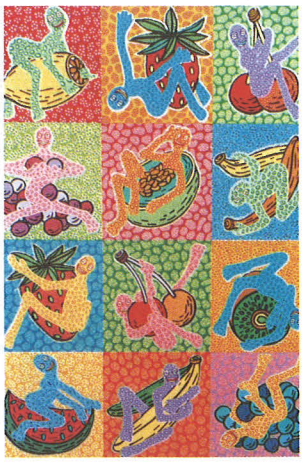
第15回市民フロア企画展

弘浦　和（のどか）展　―情熱電気くらげ―

1998/1/15（木・祝）～1/27（火）
10：00AM～6：00PM　会期中無休
市民フロア（はりまや橋・デンテツターミナルビル5階）

若手ポップアーティスト弘浦和さんの個展。平面・立体合わせて約20点余りの作品を展示します。パワーあふれるポップアートの世界をお楽しみ下さい。





財団法人　高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL(0888)73-4365
郵便振替01680-5-14869